原始仏教における「自然」について

――araññaはいわゆる「自然」か？――

橋　本　哲　夫
（種 智 院 大 学）

「自然」の意味は必ずしも安定していない。そこで，地球上の人工・人為と無縁な部分を，いわゆる「自然」とみなし，他の「自然」の意味と区別するため，「自然物自然」と呼ぶことにする。

この「自然物自然」を表す一語のパーリ語がテキストのガーター内[(1)]にあるだろうか？　あれば，それがいわゆる「自然」といいうる。

テキスト内には，naga（山），samudda（海），saritā（河），vasundharā（大地）が併記されているところがあり（Thag. 1133），この4つの単語で，「自然物自然」の全体が表現されていると考えられる[(2)]。

このうち，vasundharā（大地）は，SN. vol. 1, p. 100で「雨雲が，電光の花輪をかざし，百の尖塔を示し，雷鳴を轟かし，大地（vasundharā）に雨ふらし，高地（thala）も低地（ninna）も満たすように・・・」と言われることから，「vasundharā（大地）＝高地（thala）＋低地（ninna）」である。

一方で，その「高地（thala），低地（ninna）」は，Thag. 991, Dhp. 98, SN. vol. 1, p. 233で「村（gāma）でも，林野（araññ[(3)]a）でも，低地（ninna）にせよ，高地（thala）にせよ，聖者（アラハン）の住む土地は楽しい」といわれることから，「高地（thala）＋低地（ninna）＝村（gāma）＋林野（araññ a）」であると考える。

以上の２点を考え合わせると，「vasundharā（大地）＝村（gāma）＋林野（araññа）」となる。ここで，「自然物自然」とは地球上の人工・人為と無縁なところであったので，vasundharā（大地）から村（gāma）を除いたところのこの「林野（araññа）」がそれに最も近いものと考えられる[(4)]。「林野（araññа）はいわゆる「自然」のようである。もし，そうだとすると，林野（araññа）には，当然，vana や kānana などの「樹木のあるところ」全てが含まれるはずであるが，実情は，どうか？

テキスト内で，「樹木のあるところ」を意味するパーリ語[(5)]には，１．ārāma（grove, Ander; 園，僧園。邦訳は中村元訳。以下同じ），２．kantāra（forest, Ander; wilderness, desert, DOP.; wilderness, Noman; 荒野），３．kānana（wood, forest, a large wood, DOP.; a glade in the forest, grove, wood, PTSD.; grove, forest, Noman; 林，森，叢，叢林，荒地），４．gahana（wood, thicket, jungle, Ander; thicket, Noman; a thicket jungle, PTSD.; 密林，茂み），５．gumba（bush, thicket, jungle, Ander; 叢林），６．dāya（forest, grove, Ander; wood, jungle, forest, grove, PTSD.; forest, Noman; 園林，林），７．dhammani（a forest on dry land, PTSD.），８．nāgavana，９．pagumba:（grove, Noman; thicket, bush, PTSD.; bush, thicket, jungle, Ander; 茂み），10．brahāvana（great wood, Noman; 密林），11．mahāvana（great wood, Noman; 大きな林），12．vana—「mahāvana, nāgavana, brahāvana, vanasaṇḍa, vananta, vanatha」以外の複合語を含む[(6)]—（forest, grove, Ander; forest, jungle, wood, Noman; 叢，森，林，叢林），13．vanatha（undergrowth, Ander; underbush, Carter; underwood, brushwood, thicket, PTSD.; 下ばえ），14．vananta（grove, Noman, 林，森のほとり），15．vāneyya（variegated woodland plants, Noman; 灌木），16．visuka（dried out or up, PTSD.; 薮），17．saṇḍa—vanasaṇḍa を含む—（wood, thicket,

Ander; thicket of trees, thicket, Noman; grove, PTSD.; 茂み), 18. sanda: (wood, PTSD.; thicket, Noman; 叢林）がある[7]。これらの内，出現回数の多い「12. vana」と「3．kānana」をこれらの代表とみなし，それらの相違点を明らかにしつつ，vana が araññaに含まれる（すなわち araññaが「自然物自然」を意味する）のかどうかを確かめる。

これら3語（領域）の相違点を明らかにするために，それらの領域に住んでいる生き物に違いがあるかを見ると――まず，「鳥」に関してであるが，vana には，vihaṅgama（鳥 Thag. 1108, 1136），mayūra（孔雀 Thag. 1103），ujjuhāna[8]（Thag. 597），dija（鳥 Thag. 1103, Sn. 1134），mora（孔雀 Thag. 22）という「鳥」がおり，kānana[9]にも，dija（Sn. 1134），mayūra（Thag. 1113），koñca（鷺 Thag. 1113）という「鳥」がいるが，araññaには，まったくいない[10]。

次に，「哺乳動物」に関しては，鹿は，3領域に共通して見られる（Thag. 1144, Sn. 39, Thag. 109, SN. vol. 1, p. 201『岩波文庫』の「塵」は誤植。)。鹿以外では，vana には，sīha（獅子 Sn. 562, 1015, Thag. 832）がおり，kānana には，eṇeyya（羚羊 Thag. 1135），kuñjara（象[11] Thag. 539），dāṭhin（猛獣 Thag. 524），dīpin（豹 Thag. 1113），byaggha（虎 Thag. 1113），varāha（野猪 Thag. 1135） がおり，araññaには，kuñjara（象 SN. vol. 1, p, 124），nāga（象 Dhp. 329, 330, Sn. 53），vāḷamiga（猛獣 Thag. 602）がいる。

ここで，いわゆる「猛獣」に注目してみた場合[12]，sīha（獅子），dāṭhin（猛獣），豹，虎，vāḷamiga（猛獣）は「猛獣」であるので，「猛獣」も，一見，それらの3領域に共通して住んでいることになる。しかし，それはsīha（獅子）を現実の哺乳動物の獅子すなわち「猛獣」と考えた場合のことである。sīha を詳しく調べると事情は異なる。sīha はテキスト内で2

3回出現するが，sīhaの明記された活動領域は，vanaとgirigabbhara（山窟）とselaguhā（岩窟）の3ヶ所に限られている。しかも，vanaにおいては，‘sīho va nadatī vane’の表現のみ（Sn. 562, 1015, Thag. 832），girigabbharaにおいては‘sīhā va girigabbhare’の表現のみ（Sn. 416, Thag. 1081），selaguhāは‘sīho selaguhāyaṃ va’のみ（Thag. 367）である。sīhaを現実の哺乳動物の獅子と考えた場合，その明記された活動場所がvanaと洞窟のみであり，そこでの行動が，「吼える」，「棲んでいる」だけであるというのは，かなり不自然である。さらに，その活動場所のうち，vanaとgirigabbhara（山窟）は，「そこで不死を得るために思いをはせるのはいつのことだろうか？」（Thag. 1103）と修行・思索のあこがれの場と考えられているが，そのgirigabbhara（山窟）には，このThag. 1103以外の全用例に獅子がいる。つまり，修行・思索のあこがれの場には必ず獅子がいるのである。現実の哺乳動物の獅子の存在が，修行・思索の絶対条件でもない限り，このような表現は不自然である。したがって，vanaと洞窟にすむ獅子は，現実の哺乳動物以外のものと考えねばならない。

さらに，このThag. 1103を含む，Thag. 1091からThag. 1106までは，修行・思索生活に対する憧れを述べたものだが，そこには，尊敬・憧れの対象となっている人として，「聖者」（muni, Thag. 1092），「仙人」（isi, Thag. 1095, 1102），「偉大な仙人」（mahesi, Thag. 1098, 1106）が挙げられている。[13] これらの内，「聖者」，「仙人」が，vanaに棲む事実は別の個所でも言われている。[14] この人たちがいる故に，vanaと洞窟はあこがれの場となっているのである。この人たち，すなわち「聖者」，「仙人」を，「極めてすぐれた人」という意味で，「獅子」と呼んだのだと考える。[15]

このように，vanaにいる「獅子」は，現実の哺乳動物の獅子ではない。

したがって，vana は，araññа kānana に対して，猛獣が棲まないという違いがある。

次に，爬虫類では，siriṃsapa（reptiles, snakes, norman 蛇，爬虫類）が，suññа-geha（SN. vol. 1, p. 106）に棲み，bhujaṅgama（蛇）が，araññа（SN. vol. 1, p. 69）と gāma（SN. vol. 1, p. 69）に棲んでいるが，vana には棲んでいない。[16]

また次に，昆虫の ḍaṃsa（yellow fly, gadfly, PTSD., gadfly, Noman, 蚊），makasa（moth, pts, mosquito, Noman, 虻）が，araññа に棲んでいるが vana には棲んでいないという違い[17]がある。

さらに，植物については，テキスト内に，植物及び植物派生物（花，葉，根，蜜，茎など）は多く見られる[18]が，araññа には rukkhamūla（木の根もと）の可能性[19]があるだけで，他は一切ない。

以上をまとめると，vana には，当然ながら，多くの植物及び植物派生物があり，鳥がいるが，猛獣と爬虫類と蚊・虻がいない。一方，araññа には，rukkha 以外に植物及び植物派生物がなく，鳥がいないが，猛獣と爬虫類と蚊・虻はいるという違いがある。つまり，これらの点では，vana と araññа はまったく正反対のものである。

このように正反対の性格を持つものが，どちらかが一方を含むという包摂関係を持つことはない。したがって，原始仏教のガーター内では，araññа は vana を含まないのだと考えられる。すなわち araññа は，「自然物自然」と呼ぶに値しない。また，訳語は中村博士の指摘するごとく，「荒野」（「曠野」）が相応しい。

＜以上＞

注

(1) Suttanipāta（PTS. 1965），Saṃyutta-Nikāya vol. I（PTS. 1973），Theragāthā（PTS. 1966），Therīgāthā（PTS. 1966），Dhammapada （PTS. 1995），Itivuttaka（PTS. 1975），Udāna （PTS. 1948）内の全ガーター。

(2) 他の組み合わせもある――「mahāsamudda（海），paṭhavī（大地），pabbata（山），anila（風）」が Thag. 1013に，「paṭhavī（大地），samudda（海）」が Thag. 777に，「naga（山），samudda（海），saritā（河），vasundhara（大地）」が Thag. 1133に，「tala（大地），naga（山）」が Thag. 1065に見られる。

(3) arañña は，中村元博士は，「森」「林」「人のいない林（Dhp. 99）」と訳されるが，いまのこの用例では，仮に草原と林等を含むものとみなしているので，「林野」という訳語にしている。arañña の訳語については，中村元博士が，Dhp. 99の注記に次のように記している――「ひとのいない林――arañña. この語を日本の専門家達は，「森」とか「森林」とか訳すが，誤解を生じ易い。日本のインド学はヨーロッパから入ってきたが，インドの現地の風土に注意しなかったために，梵英辞典に forest という訳語がついでに挙げられていて，次に forest を英和辞典で引いてみると，「森」とか「森林」となっているため，そのように訳すことが定着してしまった。しかし，日本語の森林を連想すると，とんでもない間違いになる。ゴータマブッダの活動した地域には密林のようなものをほとんど見かけない。むしろ人里はなれた静かな空き地を言う。その証拠には，荻原『梵和辞典』に挙げられている araṇya の多数の漢訳語を見ても，「森」という漢字は出てこない。漢訳『法句経』羅漢品にはただ「空閑」と訳し，Udv. XXXIX, 17に対応する『出曜経』奏要品，『法集要頌経』相応品にも araṇya を「空閑」と訳している」（『ブッダの真理の言葉　感興の言葉』岩波文庫 p. 93-4）。また，SN. vol. 1, p. 5に対する注では，「Araññe ‘In the forest’（Mrs. Rhys Davids）。ただし「森」といっても日本のように樹木の密集しているところではなく，樹木がまばらに生えている，人のいない曠野，荒野である。その点で，‘In der Wildnis’（Geiger）という訳の方が誤解を与えないですむ。arañña は「阿練若」と音訳され，「空閑所」（くうげんしょ）と意訳された。『雑阿含経』のこの個所には，両訳語が用いられている」（中村元『ブッダ神々との対話』岩波文庫 p. 232-3）。さらに，A Dictionary of Pali（PTS., 2001）でも，訳語の冒頭に ‘wilderness’ が挙げられている。‘wilderness’ は「原生自然」が適訳と思うが，その場合は，山も河も海も含むことになる。wilderness（原生自然）と訳しうるものには，他に vivana（wilderness, PTSD., 林），

kantāra（wilderness, Noman, 荒野, 中村）, vanapatta（woodland wilderness, Noman, 森の樹陰）がある。

(4) ただし，もともとvasundharā（大地）は，山，河，海を含んでいないのであるから，かなり限定された「自然物自然」である。類似の定義が，Vinaya-Piṭaka, vol. 3, p. 46に見られる――「araññaとは，村落と村落の周りを除いたものをaraññaと言う（araññaṃ nāṃ ṭhapetvā gāmañ ca gāmupacārañ ca avasesaṃ araññaṃ nāma）」。また，Sn. 119とSN. vol. 1, p. 69ではaraññaとgāmaで一つのまとまった領域を表している。

(5) 略号――Ander. =Glossary of "A Pali Reader with Notes and Glossary"; by Dines Andersen Third Edition, Revised. 1901-1907, PTSD. = "The Pali Text Society's Pali-English Dictionary" Edited by T. W. Rhys Davids and William Stede, PTS. 1956, Carter="Dhammapada A New English Translation with the Pali Text and the First English Translation of the Commentary's Explanation of the Verses With Notes Translated from Sinhala Sources and Critical Comments" by John Ross Carter and Mahinda Palihawadana, Oxford University Press, 1987, Noman=K. R. Norman "The Elders' Verses I Theragatha Translated with an Introduction and Notes" 1969, PTS., "The Elders' Verses II Therigatha Translated with an Introduction and Notes" 1971, PTS., "The Group of Discourses (Sutta-nipata)"; Second edition, Translated with Introduction and Notes by K. R. Norman, PTS. 2001, CPD.="Critical Pali Dictionary" Begun by V. Trenckner, Revised, Continued, and Edited by Dines Ander. sen, Helmer Smith, and Hans Hendriksen, Published by The Royal Danish Academy of Sciences and Leteers, DOP.="A Dictionary of Pāli Part I, a-kh" by Margaret Cone, PTS. Oxford, 2001。中村元博士の訳語は以下に拠った――中村元『ブッダ神々との対話』岩波文庫，1986，『ブッダ悪魔との対話』岩波文庫，1986，『ブッダのことば』岩波文庫，1991，『仏弟子の告白』岩波文庫，1989，『尼僧の告白』岩波文庫，2001，『ブッダの真理のことば感興のことば』岩波文庫，1978，1997。

(6) 含まれる複合語：ambavana「マンゴーの林」，asipattavana「鋭い剣の葉のついた森」，kubbanaka「疎な林」，jīvakambavana「ジーヴァカのマンゴー林」，jetavana「ジェータ林」，bhesakaḷāvana「ベーサカラー林」，sālavana「サーラ樹の林」，sītavana「寒林」。邦訳は中村元博士による。それらのうち，ambavana，jīvakambavana，jetavana，bhesakaḷāvanasītavanaはNoman博士によれば，固有名詞である（K. R.

Norman “Elder’s Verses I” p. 305-9, Index of Names, K. R. Norman “Elder’s Verses II” p. 182-3, Index of Names)。nāgavana (elephant glove, Ander.), brahāvana, mahāvana, vanasaṇḍa, vananta, vanatha を含まない理由――nāgavana は，mahāvana の別名の可能性（赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』p. 437）があり，brahāvana は vana の一種ではなく，「強い意欲」を意味し，vanasaṇḍa は kānana の一部であり，vananta は，“at the end of desires”（Ander.　ad Dhp. 305，p. 227）と解することも可能であり，vanatha は，「欲望」を意味する可能性が高いから。

⑺　vananta は，“at the end of desires”とも解される（Ander.　p. 227, ad Dhp. 305）

⑻　ujjuhāna（Thag. 597）は，注釈によれば，pabbata（山）の名前であり，かつ sakuṇa（鳥）の名前でもある。中村元『仏弟子の告白』岩波文庫　p. 264参照。

⑼　kānana の vanasaṇḍa には kokila（カッコー Thig. 261）がいる。

⑽　SN. vol. 1, p, 7, 203の，ṭhite majjhantike kāle, sannisinnesu1 pakkhisu, saṇate va mahāraññaṃ, taṃ bhayaṃ paṭibhāti man＝ti.　ṭhite majjhantike kāle, sannisinnesu pakkhisu, saṇate va mahāraññaṃ, sā ratī paṭibhāti man＝ti. は「日も盛りのとき，鳥ども（pakkhin）が（枝に）とまっているときに，大きな森（mahāraññ a）が鳴り響く。それは，私には恐ろしく思われる。日も盛りのとき，鳥どもが（枝に）とまっているときに，大きな森が鳴り響く。それは私には楽しみと思われる」（中村元『ブッダ　神々との対話』岩波文庫）“T is the high hour of noon; the birds rest silently. Boometh the mighty forest; fearsome that sound to me. T is the high hour of noon; the birds rest silently. Boometh the mighty forest; enchanting that sound to me.”(Mrs. Rhy Davids “Kindred Sayings, vol. 1, p. 11, 260)とも読め，「鳥」が「大きな森（mahāraññ a)」にいるとも取れるが，pakkhin（pakkhisu）を ‘participating’（PTSD.）「参加者仲間」と解し，‘saṇate’ を異読の ‘palāte’（run away, PTSD.）とし，訳を「日も盛りのとき，参加者仲間と一緒にいるときに，大きな araññ a に出て行くことは，私には恐ろしく思われる（略）私には楽しみと思われる」とし，「鳥」と「大きな araññ a」には接点はないと考える。

⑾　「象」を表す語には，１．kuñjara（おそらく野生の象，また雌象に対する雄象，固有名の場合もある，araññ a, kānana, mahāvana に棲む，岩山に声が届く），２．gaja，３．kareṇu（雌象，mahāvana に棲む），４．nāga（主として飼いならされた象），５．vāraṇa（岩山に声が届く），６．savā-

hana（象とは限らない，ノーマン博士はelephantまたはmountまたはtrainと訳す。中村博士は1例のみ「象」（Sn. 442），他は「軍勢」），7．hatthin（象軍，財産，乗り物として等）がある。araññaにいる象（Dhp. 329, 330, Sn. 53, SN. vol. 1, p. 124, G）は，全て群れを離れた象である。一方，kānanaの象（Thag. 539）は，ノーマン博士，中村博士によれば複数として訳される。vanaにnāgavana「象の林」を含めると，vanaにも象が棲むことになるが，ここでは，nāgavanaはmahāvanaに近いものと考える。

⑿ SN. vol. 1, p. 180に見られる“gambhīrarūpe bahubherave vane”は，bheravaの「恐ろしいもの」が猛獣ではないか，vanaが「森・林」ではないか，あるいは，bheravaをvanaにかかる形容詞と考える。

⒀ 他に，「真理を重んじる人々」（dhammaguru, Thag. 1096），「立派な人々」（tādin, Thag. 1096），「真実を見る人」（yathāvadassin, Thag. 1096），「感覚に打ち勝った人」（jitindriya, Thag. 1096），「努める人」（padhāniya, Thag. 1096）も言われるが，これらは，テキストの他の個所で，vanaとの関係を言及されることはない。

⒁ muni――SN. vol. 1, p. 181, Sn. 165,221. isi――SN. vol. 1, p. 33,55x2, Sn. 684. Thag.948.

⒂ sīhaは，ここでは全て，「勝利者」，「世尊」，「聖者」などの「極めてすぐれた人」の喩えとして使われており，sīhaを「極めてすぐれた人」と訳しても各ガーターの要旨は変わらない。

⒃ SN. vol. 1, p. 69には「村（gāma）にせよ，araññaにせよ，蛇を見る場合には，幼いからといってあなどってはならない」とあり，gāmaとaraññaで「あらゆるところ」を意味していると取れば，vanaにも蛇がいることとなるが，今はそうとらない。

⒄ 「araññaにいて，蚊や虻にかまれながら，心に念じて，耐え忍ぶべきである。――強い意欲（brahāvana）で戦場の先陣にいる象のように」（Thag. 31, 244, 684）。ḍaṃsaは，「空屋（suñña-geha）」にもいる（SN. vol. 1, p. 106）が，その「空屋」は，vanaにあるのではないと考える。kānanaについては，現時点では，その範囲が不明なので確定できない。

⒅ テキスト内の植物及び植物派生物――agga（crest,Norman, 枝），āmalaka（name of tree），amba（mango），ambusevāla（water plant），assattha（fig tree, Norman），aṭṭhi（the stone of a fruit, PTSD.），bhisa（lotus），bīja（seed），bīraṇa（name of grass, tree?），candana（sandal wood, 栴檀），chadana（foliage, Noman, 苞（おおい）），cīnaka（kind of bean），dālikā（a kind of creeper, PTSD.），dāru（wood, timber a stick, log of wood,

Ander.), dāruka（木切れ), dabba（name of grass), dhañña（corn), duma:（tree, Norman; tree, PTSD.), ḍāka（dried-begetable, eatable herb), ḍiṅgulaka（name of a plant), elambuja（lotus), gavi:（creeper, Noman), indagopaka（indagopaka＝insects 昆虫, Norman, 草), jambu（rose apple tree, Ander）kālā（a kind of plant, creeper, CPD.), kadali（banana), kaliṅgara（log), kaḷīra（shoot), kapiṭṭha（wood apple tree), kaṭṭha（chips, Norman), kaṭṭhaka（name of plant), khāṇu（stump of tree), kiṭṭha（corn), kola（＝he jujube fruit, PTSD., 棗), koviḷāra（n. of tree), kumuda（lotus), kusa（grass), kusuma（flower), kuṭaja（a kind of root, PTSD.), latā（creeper), laṭṭhi（sprout of a plant, PTSD.), māluvā（name of plant, 蔓草), madhu（honey), makula（bud), mallikā（ジャスミン), muḷāli（lotus), muñja（name of grass), mūla（root), nāḷa（＝nāla, pipe), naga（trees, Norman), naḷa（＝nala, reeds), nigrodha（name of tree), pādapa（tree, Norman), pārichatta（coral tree), pāṭalī（f. name of tree), pāyāsa（粥), pabbaja（name of grass, い草), paduma（lotus), padumin（lotus), palāsa（leaf, PTSD.), paṇṇa（leaf, Norman, 茎), patta（leaf), pattali（plantain＝banana), phala（fruit), pokkhara（lotus), poṭakila（a kind of glass), puṇḍarīka（lotus), puppha（flower), pupphita（flowerly, Norman), rukkha（tree), sākhā（branch, PTSD.), sāla（name of tree), sāli（grains of rice, Ander.), sāmāka（稷（きび)), sāṇavāka（hemp, 麻), sāsapa（mustard seed, Ander. からし，からし菜), sallakī（name of tree, PTSD.), sara（葦), sikhara（bud), simbali（silk-cotton tree, PTSD.）, susaddala（adj. good-grassy), tāla（＝name of tree), tacasāra（(even) the best（bark i. e.) tree, PTSD., 茎の細い植物), takkārī（name of a tree, アカシア), taru（tree, PTSD., Norman), tila（sesame, sesame seed, Ander.), timbaru（name of tree), tiṇa（grass), tiṇakaṭṭha（grass-chips), tūla（cotton), udumbara（fig), ummā（flax, 亜麻), uppala（blue lotus), usīra（name of a grass), vārija（lotus), vaṃsa（bamboo), vassikā（jasmunum sambac, a plant PTSD., ジャスミン), vassikī（a sort of jasumine, Ander.), veḷu（veṇu, bamboo), vīhi（rice), viṭapin（tree, PTSD.), yava（barley, PTSD.)＜注＞英語アルファベット語順。これらの内，agga（crest, Norman, 枝, Sn.233), dāruka（木切れ, SN. 1, vol. 1, p. 202x2,), māluva（name of plant, 蔓草, Sn.272, SN. 1, vol. 1, p. 207), phala（fruit, Dhp.334, Thag.399), pupphita（flowerly, Norman, Thig.370,371), kusuma（flower,Thag.545）が，vana にある。

⒆ aranna と rukkhamūla は，SN. 1, vol. 1, p. 220, Thag. 887, 925で，“arannе rukkhamūle（-su）”というイディオム的表現が見られるので，また，前後の接続詞（ca, vā）の使い方から，「arannа にある木の根元で」という意味だと考える。